

小学校における薬物乱用防止教育について  
—「薬物乱用と健康」の授業前後の意識の変化に着目して—  
島 敦志（生涯スポーツ学科 学校スポーツコース）  
指導教員 谷川 尚己

キーワード：シンナー，覚せい剤，大麻，危険ドラッグ

### 1. 緒言

日本では薬物乱用について大いに注目されている。成長期に薬物に手を染めてしまうと身体に大きな悪影響を与えてしまう。したがって、小学生のうちから正しい知識を理解することができていれば、未成年者の薬物乱用がゼロになるのではないかと考えた。

そこで、小学校で行われる「薬物乱用と健康」の授業を行い、児童たちが正しい知識を理解することができているのかについて、その理解度の変化について研究することとした。

### 2. 研究方法

調査対象は、滋賀県内の小学校3校の小学校6年生241名。調査は、薬物乱用についての9項目のアンケートを授業前後で実施し、児童の理解度の変化について調査を行う。横浜市の啓発運動後の児童の意識の変化、池田の中学生を対象とした同様の研究と比較を行う。

### 3. 結果と考察

授業前後でのアンケート結果より、授業後に9項目全てにおいて理解度が高まった。授業の中で、薬物の特徴や使用による体への影響等について学習の成果だと考える。授業前後で薬物に対して、覚せい剤と大麻はもともと知っている児童が多く、授業前後であまり変化がなかった。危険ドラッグは81.5%から97.3%と約15%増加した。授業の中で危険ドラッグについても薬物の勧誘等で児童に興味を引き付けることができたと考え。一方、シンナーについては、授業前は30.5%であっ

たが、授業後には87.4%と3倍近くに変化した。池田(2013)は、9項目全ての項目で授業前より授業後で理解度が高まっていると報告している。本研究でも同様の結果が得られたことから、小・中学生ともに授業後は授業前よりも確実に薬物の理解度が高くなっていると考える。授業の内容にも児童の理解度が関連していると考え。

また、本研究と横浜市の結果を比較すると本研究の授業前より横浜市の結果が全て下回っている。したがって、児童は薬物防止等の啓発運動に参加することより、「薬物乱用と健康」の授業を受ける方が理解度が高いと考える。

### 4. まとめ

授業前後で比較すると、授業後には9項目全てにおいて、「知らない」から「知っている」に児童の理解度が高まっていた。

薬物についての正しい知識や怖さを理解する授業は「喫煙・飲酒・薬物乱用と健康」の授業だけである。小学校、中学校では授業だけではなく、薬物乱用防止教育の専門家を招き、学年ごとあるいは学校全体で薬物乱用防止を呼び掛ける機会を設けること等も必要であると考え。

### 引用・参考文献

池田真基(2013)中学生における薬物乱用防止教育について